支倉徒然
はせくらつれづれ

～ セピア色の風景 ～

「冬の盛岡 2」

青田　茂雄
仙台建設業協会専務理事

「当時の盛岡は、ひと冬に零下15度の日が3、4回あり、池が全面凍りスケートリンクが三面もできる酷寒の街でした」。

これが前回（2023年2月号）の「冬の盛岡」の出だしでした。池とは、久保学園（現・盛岡誠桜学園）脇の高松の池。本当に全面が凍り当時誰が整備してくれたのか、うっすらと降り積もった雪をきれいに楕円形に払いのけて、市民リンクが出来上がりました。

それだけ寒いわけですから最高気温が零下、いわゆる真冬日は普通にありました。近所の方々の「今朝は、〇度だったねー」のあいさつは、「零下」が省略されていました。通常、最低気温は日の出前に記録されるとのこと。一晩飲み明かして朝、下宿に帰る学生の身の私は、零下15度に近い時間帯にふらふら歩くことを、しばしば経験しました。

この零下15度前後の状況とはどういうものか。まず、「寒い」と感じる前に普通に呼吸ができません。そこで息を吸えないので、自然と口に手を当てて直接冷たい空気が入らないようにしました。酔っ払いながらも、「凍死とはこうなって死ぬのか」と思ったものです。さらに『鼻毛が凍る』ことも体感しました。鼻を上から押さえたら、本当に刺さるようでした。

わが下宿の部屋では、ストーブをテレビ台にしていました。冬の中ごろ、いよいよ寒くなったのですがテレビ台にする代わりのものがなく、いっそのことひと冬、ストーブ無しで過ごしてみようと、若者特有の無謀な挑戦をしました。暖房は電気コタツのみ。そこに足を突っ込んで寝ました。当時の下宿、サッシなどありません。加えて北側の部屋。出窓の内側には障子こそありましたが、吹雪の強い夜が明けた朝、その隙間から雪が一筋。コタツの上のやかんには氷が張っていました。春までが長かった……。

下宿の部屋から見える、南部片富士こと岩手山は悠然と座っていました。冬の盛岡の向こうにたつ岩手山の白さは、いまだセピア色になっていません。

●あおた・しげお　1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める